

寺報 信仰文化

通刊 39 号

千葉県いすみ市荻原2136 ☎0470 (86) 3816

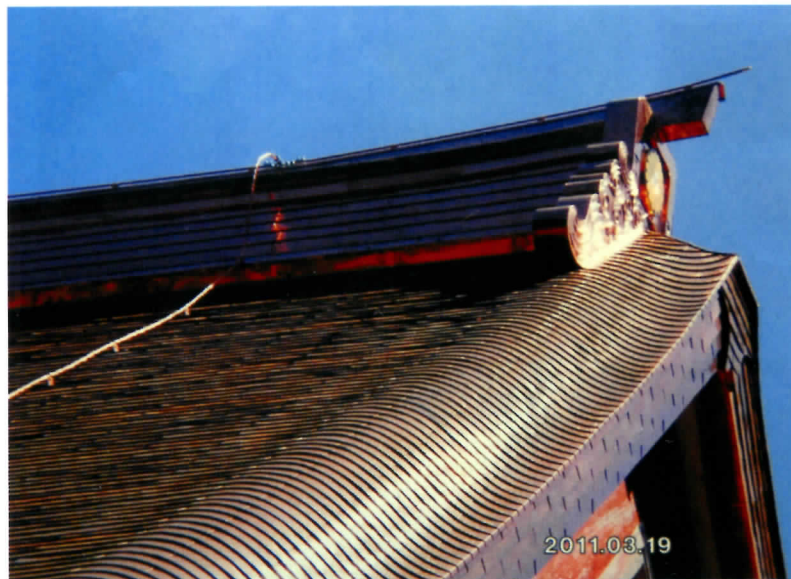
行元寺発行 FAX 同上

歓迎 観光・研修旅行

土・日・祝 個人・一般公開
平日 予約 団体等

10:00~16:00

文化財修復基金 ひとり300円志納



一文字平家葺 箕甲の曲線美



改修なった本堂屋根

聳える卓越技巧の美 いすみ市 支援 本堂の耐震化なる

数年来の懸案だった耐震対策による行元寺本堂屋根の改修工事（田中國男建築委員長

が完工、併せて向拝及び山門彫刻等の復元が4年の歳月を経て完成し、6月5日落慶式

典を迎える。この式に天台宗南総教区浅野玄航宗務所長、太田洋いすみ市長はじめ多くの来賓、寺院住職、工事関係者、檀信徒ら参加のもとに落慶法要、落慶式が行われる。本堂改修には檀徒からの多額の寄付、および「いすみ市」からの高額の補助金を合わせ、6千数百万円で完成した。

施工は寺社建築を多く手掛けている阿部工業（阿部誠社長）、建築技術顧問には奈良の瀧川寺社建築（國樹彰社長―平城京大極殿等新築―）が当り改築の苦勞は大きかった。本堂は約4百年前の天正14年に成った現内陣に3百年前の元禄年間12年の歳月を経て増築された当代の大建造物。寄棟茅屋根を昭和の大改修で、入母屋椋瓦葺きに改造した。しかし、屋根瓦等の総重量は90トンを超えているため昨今、地震対策に迫られ、銅板瓦葺きの今回の大改修となった。従って屋根の軽量化に成功して重量も10数ト、各所に筋交を入れ補強をなした。

今回の工期は約1年、仮設の素屋根づくり、瓦の解体、野地下腐朽補修から建物の傾斜対策、さらに堂内50余面の壁面に、細かく筋交を入れ耐力壁とするなど苦勞が続いた。屋根銅板は一文字葺き、7センチ幅に折り曲げ10段ちかくの葺き上げで、特に屋根隅の破風ぎわの曲面の箕甲づくりは、手たたきで図面にあたるなど、卓越した技法を発揮している。

（彫刻等復元は4面参照）

改築工事の1年

—苦勞の足どり—

屋根銅板S字加工

箕甲づくりに励む阿部幸信氏



瓦除去作業



屋根修築工事着工
22・4・19

暑さの中瓦除去作業つく



素屋根仮設工事

入母屋野地化粧づくり



いすみ市 内覧会

堂内全壁上に筋交づくり



屋根シート覆



大棟と鬼板に輝く「葵紋」 幕府の心の支え 行元寺亮運

落慶なつた本堂屋根大棟及び両端鬼板等に、「天台宗紋」2点「葵紋」3点が阿部誠社長から寄進された。

この葵紋は徳川家から賜つた本堂正面の二本の柱に光を放つ御紋に由来する。徳川家康、秀忠、家光公三代にわたつて仕え幕府の精神的支柱をなした天台僧正の名は広く知られているが、共に徳川三代の講師を務めたのが、富田（現山武市）出身で行元寺18世の亮運であった。「徳川実記」によれば、慶長18年（1613）2月天海と亮運は駿府城で間

答を行い家康を満足させて、家康から亮運に酒食と銀10枚と、披物2領を賜つたとある。この年と翌慶長19年にわたつて毎月数日にわたり、亮運は家康の講師を務めている。

2代秀忠は上野台地の一部3代家光は上野忍ヶ岡の地など31万坪と白銀5万両を天海に与え、江戸城鬼門除けとしての東叡山寛永寺が創建された。これによつて天海は開山主、亮運は東叡山初代学頭となつて、天海亡きあと3代家光の師をつとめ、関東各地に壇林において天台教学を中心に文化の振興に努力した。

歴代將軍も代々の学頭に帰依し幕府の心の支えとなつた。特に綱吉は徳川家御用彫師の高松又八郎邦教を行元寺におくつて、「龍」に「錦鶏と牡丹」を作成させたことで、徳川家との縁は長く続いた。

天海を関東天台の生みの親とすれば、亮運は育ての親といわれる。現在、上野界限が

学問芸術の中心的存在の基いは、房総富田出身で行元寺住職亮運にあったといつてよい。



協議中の技術顧問

瀧川寺社建築 國樹社長（右）
阿部工業社長

3月2日銅板葺き
終了、3月11日地震
時に避雷針アース接
続で完成した。



建築関係者（敬称略）

建築委員長 田中 國男
工事施工 阿部 誠
技術顧問（奈良）國樹 彰
行元寺責任役員 市原 与作
総代会長 渡辺 義夫
会計担当 古山 忠正

本堂向拝前
天水桶寄付
阿部 誠様

総朱塗り 極彩色彫刻復元



写生、装飾的な「寛永文化」出現



彩色中の吉木画伯

山門の動物たち

山門を飾る彫刻には、兎、虎、といった地上をほう動物から、麒麟、竜、海馬、鳳凰といった霊鳥霊獣などの想像上の生き物に注目される。

写真 上から兎・海馬・虎・麒麟



ＪＲ東日本文化財団支援
平成19年から4年の歳月を経て、みごと復元された山門の朱塗りに彫刻の極彩色。それに本堂向拝の「猿」「唐獅子」「龍」など総点数は

40件を越す。これは「ちばＤＣ」を機にＪＲ東日本鉄道文化財団の3年にわたる多額の支援と、井上ツヤ氏をはじめ篤志者の寄進、また拝観料に檀徒の布施などの浄財すべてを投じ3千数百万円で復元完成した。

これら彩色等は現代の名工に指定され、国宝、重文の専門業者の斎藤漆工芸（斎藤俊彦社長）が当り、彫刻彩色は吉木丈画伯によった。吉木氏

は日光東照宮の彫刻復元と多くの国宝重文を担当した斯界の大権威で、自らは絵師を名乗り各時代絵画にも造詣深い。行元寺山門はもともと寛永文化で、彫刻と彫刻との梁間に絵画の痕跡も残るといふ。この寛永文化を盛り立てたのが、かの狩野探幽で桃山文化の豪壮な様式から瀟洒へ、そして装飾的、さらに写生味を加えた特色へとなった。本堂向拝は高松又八の彫刻になる桃山様式で、日本随一の評もある。この弟子等によって成ったとされる山門彫刻の中には、彫刻が莫股からはみ出た特色もあり、羅漢の口中の歯まで彫刻された繊細な彫刻にも注目される。

山門の柱や板壁の朱色は、水銀朱や丹からなる、これに彫刻の彩色はすべてラピスラズリ（原産アフガン日本名瑠璃）さらに孔雀石等の顔料が施されて光を放ち、いわば日光の縮小版総版ともいえる。

本堂向拝、山門彫刻など

ＪＲ東日本文化財団支援 拝観、篤志、布施等浄財で